

にし、彼らを過去化し、遺骨をモノ化するいわば近代知の枠組みのなかでは、「戦死者の骨を拾うことは、死者との対話だ」という言述それ自体が、レトリック以上の意味を持ちにくい。しかし、具志堅氏は、もの言わぬ遺骨の死の状況、死者の思いに迫ろうとする。そしてその死をもたらずに至った国家の暴力性、戦後も十分に遺骨収集を行う気概のない国の態度などを、遺骨収集の現場から穿つ。死者に関する適正な扱いを求めている事業としての遺骨収集というビジョンが見てとれる。具志堅氏は、遺骨や遺品についた土を刷毛や筆などで丁寧に取り除き、当時の記録文書とも照合しながら死者の特定と遺族への遺骨の返還を行ってきた。二〇〇九年秋には、厚生労働省、沖縄県、那覇市にはたらきかけ、遺骨収集を公共事業にすることに成功した。ホームレスや生活保護の受給者らの就労支援となる「緊急雇用創出事業」として認可されたのである。

重機で掘り起こされる際にバラバラになる遺骨も多く、工事に現場に盛られた土の表面には胸や指や足の部位の遺骨が出ていることもある。具志堅氏は、その遺骨が分かるように、そこに小さな赤い旗の目印を付け、遺骨の行方を見続ける。六六年前に激しい戦いの中で死んでいった人間（の骨）が現在、収入もなく生きることに辛ささえ覚える人間を支えている。このように現代の沖縄では、遺骨収集と雇用問題がひとつの結節点を見せる。ここには、遺骨（死者の身体）を、市民の平和学習や、就労希望者の雇用創出へと活かしていく新しい社会デザインがある。その基盤には、骨を人間らしく扱うという「死者との倫理」を生きる意志および、「尊厳ある遺骨収集」の実現という

理想が見てとれるのである。

パネルの主旨とまとめ

村上興匡

本パネルは故鷲見定信教授を代表者とした二つの科研、①「沖縄における死者慣行の変容と「本土化」および②「沖縄死者慣行の現代の変容に関する地域研究——「本土化」と「沖縄化」の相互作用」を背景としている。①においては、現代沖縄、特に都市部において仏式葬儀慣習や葬祭業者の関わりなど、従来見られなかった本土的な死者慣行が急激に広まる一方で、家筋や墓地の意識などの伝統的要素が形を変えながら根強く残されていることが明らかになった。そこで②では、本土的慣習の普及を、単に移入にとらえず、本土的慣習と沖縄的慣習の相互作用にとらえる必要があると考え、沖縄から本土への移住者の本土文化受容との比較研究を行った。自らの社会的、文化的慣習を本土にあわせて新しい形を作り出すことを「沖縄化」とすると、死者慣行にとどまらず、今日の沖縄の社会や文化で起こっている変化の多くを「本土化」と「沖縄化」の相互作用としてとらえることが出来る。本パネルでは、葬儀および墓地、観光、遺骨収集活動の三つについて、「本土化」と「沖縄化」の相互作用をみる発題を行った。（発表内容については各発表要旨を参照）

コメンテータの具志堅邦子氏からは、近代以降の沖縄の社会

変動としては、①明治の土地整理事業による私的所有権確立と、明治民法による父系嫡男相続の法制化という二つの要因により位牌継承慣行が民衆化したこと、②その私的所有権確立によって貧富の格差が生じ、農村の余剰人口が近代資本主義と日本帝国主義の最前線にディアスポラ（離散）したこと、③戦後の米軍支配で本土への渡航が制限されたため、本土にディアスポラすべき農村の余剰人口が基地周辺に集中し、日本の高度成長期とは異なる都市化が短期間に進行したこと、④本土復帰による法制の明文化、⑤沖縄ブームとバブル経済による変化の五つが考えられるが、本パネルでは④と⑤しか扱っていないのではないかと指摘があった。

村上発表に対して、沖縄の死者慣行はシマ社会的な来訪神信仰と位牌継承慣行の二重構造だが、位牌継承慣行の民衆化は経済や人口の右肩上がりを前提にしており、経済や人口の停滞する現在、慣行の継続が困難な状況であるため、本土で「沖縄化」された慣行が受け入れられている、沖縄社会と本土社会の流動化が一致する側面があり、「本土化」と「沖縄化」の相互作用により見えてくるものがあるのではないかと、この指摘があったのに対して、現在本土でも家的な継承が難しくなっているのは事実であり、それに代わる人間同士のつながりとして、本土から沖縄に期待する側面もあるのではないかと回答がなされた。

塩月発表に対しては、シマ社会的な見方をすれば、シマには固有のミクロコスモスがあり、聖地巡礼や他シマの聖域を拝む慣習はない。また近年地方公共団体が琉球王朝の正統性を強調

し社会資本とする傾向があり、これからどのように変容していくかが問われる。ノロやユタの構造化・相対化は重要だが、シマ社会の女性全員が年齢階梯的に神女となる基層文化があると指摘した。それに対し、地元の人々の戦略性が新しい文化の創造につながる。アガリウマは王朝文化を模した他シマも巡る庶民慣習で、それを用いたイベントでは、新しい価値として医療的な意味づけも組み込まれている、との回答がなされた。

佐藤発表に対しては、沖縄のシマ社会的な思考法は近代市民社会的なツリー型ではなく、リゾーム型であるが、ガマフヤーの遺骨収集は後者の思考法からできており、本来国民国家が行うべき戦死者慰霊を、個人が国家を超え無化することに意義があるのではないかと指摘した。それに対して、ガマフヤーの活動は、シマンチュウならではの精神性をよく表すものであり、ホームレス対策として働くことおよび骨にさわるのが作業者にとりどんな意味を持ちどのようなように過ごすか、現場調査を通してみていきたいとの回答がなされた。